

万葉集4401番歌の「韓衣」と「母なしにして」 の解釈について

竹生 政資¹, 西 晃央²

An Interpretation of the First and Fifth Phrases of the 4401th Poem in Manyo-shu

Masasuke TAKEFU, Akihiro NISHI

要 旨

万葉集4401番歌「韓衣 裾に取りつき 泣く子らを 置きてそ来ぬや 母なしにして」は、信濃国の防人の歌である。一見やさしそうに見える歌であるが、実はいくつか問題がある。通説では、防人の妻はすでに死亡していると想定した上で、初句から第四句を「防人が自らの韓衣（軍服など）の裾に取り付いて泣く子を家に置いて旅立って来た」と解している。しかしこの想定だと、子供が泣く原因は「父がいなくなる」ことであるから、結句は「父なしにして」（あるいは「父母なしに」）となるのが自然ではなかろうか。また、幼い子どもが着物の裾に取り付いて泣くイメージは、今も昔も、母親に対するイメージであるのに、通説は父親の着物の裾に取り付いて泣くと解しており、明らかに常識に反している。本論文では、防人の妻は生きており、子供が幼くて見送りに連れて行くことができないため、見送りに出ようとする妻の韓衣の裾に取り付いて泣く子供を家に残して旅立って来た、というごく常識的な内容の歌だと解する。

1. はじめに

万葉集4401番歌は巻二十に収録されている110首の防人歌の一つである。歌の左注によると、信濃国小県郡（現在の長野県上田市付近）の国造である他田舎人^{をさだ}大島という防人が詠んだ歌である。本論文の目的は、この歌の特に初句「韓衣」と結句「母なしにして」に焦点をあてて通説の妥当性を再検討し、新しい解釈を提案することである。そこでまず、歌の内容（訓読文と原文）を新日本古典文学大系本に従って掲載することから始めよう^[1]。

20/4401 ^{からころむ}韓衣 裾に取りつき 泣く子らを 置きてそ来ぬや ^{おも}母なしにして

【原文】可良己呂武 須宗尔等里都伎 奈苦古良乎 意伎旦曾伎怒也 意母奈之尔志弓

¹ 佐賀大学 医学部 地域医療科学教育研究センター (takefu@cc.saga-u.ac.jp)

² 佐賀大学 文化教育学部 理数教育講座 (nishia@cc.saga-u.ac.jp)

次に、先行研究の概要を知るために、代表的な万葉集注釈書に掲載されている訓読文、現代語訳、注釈を出版年の新しいものから順に掲載する。記載形式をそろえるため内容に影響を与えない範囲内で順序や記号表記などを一部変更し、漢字の旧字体は新字体で置き換えた。

①新日本古典文学大系^[1]

【訓読文】韓衣からころむ 裾に取りつき 泣く子らを 置きてそ来ぬやおも 母なしにして

【現代語訳】韓衣の裾に取り付いて泣く子らを残して来たのだ。母親もないのに。

【注釈】以下三首、信濃国の防人の歌。初句の原文の「武」は元暦校本・類聚古集・広瀬本に拠る。仙覚本の「茂」によると訛りのない語になるが、万葉集に仮名「茂」は三例のみ（四八五・八一二・一五二〇）。「韓衣」は大陸ふうの服。枕詞とする説も捨て難いが、今は防人としての官給の服と解しておく。「置きてそ来ぬや」は詠嘆の表現。係り結びの「そ来ぬる」になっていない。「おも」は子らの母親。既出（四三八六）。

②新編日本古典文学全集^[2]

【訓読文】韓衣からころむ 裾に取り付き 泣く子らを 置きてそ来ぬやおも 母なしにして

【現代語訳】韓衣の裾に取りすがって泣く子どもを残して来たわい 母親もないのに

【注釈】韓衣——コロムはコロモの訛り。大陸様式のつめえり詰襟・つつそで筒袖の衣服をいうが、ここは作者の着ている軍衣袴をさす。○泣く子ら——このコラは子ども。○置きてそ来ぬや——係助詞ソがありながら完了の助動詞ヌの終止形で結ぶのは違例。ヤは詠嘆の終助詞。○母なしにして——このオモは子どもの母である妻をさす。最近死去したのであろう。子が父方で育てられたことを示す点で興味深い。

③講談社文庫（中西進）^[3]

【訓読文】韓衣からころむ 裾に取りつき 泣く子らを 置きてそ来のやおも 母なしにして

【現代語訳】韓衣の裾にとりすがって泣く子を残して来たことだ。母もないのに。

【注釈】韓衣——コロムはコロモの訛り。裾の合わない作りの渡来人の服装で、裾を強調するために用いた。日常着用のものとして用いたのではない。○子ら——「ら」は愛称。複数ではない。○来のや——キヌヨの訛り。正しくは「来ぬるよ」。○母なしにして——国造として同居婚だったのだろう。今は妻が死亡しているらしい。

④万葉集註釈（澤瀉久孝）^[4]

【訓読文】韓衣からころむ 裾に取りつき 泣く子らを 置きてそ来ぬやおも 母無しにして

【現代語訳】着物の裾に取りついて泣く子供らを、あとに残して来てしまったことよ。その子の母もゐないのに。

【注釈】韓衣——「武」の字、元、類（十六・一九七）による。西、紀など「茂」に作る。コロムはコロモの訛。韓風の着物。「防人としての官給の服であらう」と全注釈にある。

裾に取りつき——「宗」の字、元による。類、西、細など「曾」に作る。「裾」のソは、「須蘇」（四四〇八、五・八五五）と甲類であるから「曾」（乙類）でなく「宗」（甲類）によるべきであらう。

泣く子らを——「コラは、妻とも、子とも解せられるが、この歌の場合は、五句に、母無しにしてと言つてゐるのだから、子どものことであらう」と全注釈に云つてゐる通りである。

置きてぞ来ぬや——「ぞ」をうけて「来ぬる」とあるべきを「来ぬ」とある（四三五七）。「怒」の字、西、紀に「奴」とあるが、元、類その他による。「怒」は甲類のノであるからキノヤとも訓めるが、ここはヌの仮名に使ったかと思はれる（四四〇三）。

母無しにして——「母」は子供の母、即ち防人の妻である。母の居ない孤児を、といふのである。

⑤日本古典文学大系^[5]

【訓読文】韓衣からころむ 裾に取りつき 泣く子らを 置きてぞ来ぬや 母おもなしにして

【現代語訳】裾に取りつき泣く子供たちを置いて来てしまった。その子の母もいないのに。

【注釈】韓衣——枕詞。裾にかかる。原文、可良己呂武。武は文甫切。miuの音。ムのの仮名。虞韻の文字は、敷・符・父・付・赴などはフ、無・務・武・舞などはムのの仮名、すべてウ列だけに使われて、フとホ、ムとモと、ウ列・オ列に両用はされない。○裾——底本、須曾。曾はソ乙類の仮名。スソのソは甲類。従って違例。宗はソ甲類の音を表わす。従って元暦本の文字を採る。○母——原文、意母。信濃国ではオの仮名に意の字を専用している。意は広韻、於記切。上古音 iə → 中古音 iï という変化を経た文字。従って推古遺文・古事記にはオの仮名として使われたが、万葉集では時代の古い仮名を使った巻五に二十余例使われた他に、それを模倣したと見られる大伴家持の用例少数の他は、わずかしか見られない。新しい字音による日本書紀ではオの仮名を大部分を於で書き、その四分の一ほど飴の例があり、意は垂仁紀の古い文献の文字をそのまま引用したところに一例見えるだけである。奈良時代の文献に見えるオの仮名は、意・於・淤・憶・乙・飴・礮・應・隠であるが、その全部が中舌母音əを中心とするものであるから、奈良時代のオはoではなく、öであったろうと考えられる。これは、オコナフ・オト（音）・オノ（己）・オモ（面）・オモフ（思）などオと結合したコ・ト・ノ・モが乙類の kō, tō, nō, mō であるところから見て、母音調和の点でもふさわしいことである。

ここに示した五つの先行研究を見ると、訓読文の第三句に関して、「置きてぞ来ぬや」（①、②、⑤）、「置きてぞ来ぬや」（④）、「置きてぞ来ぬや」（③）の三通りの訓み方があるが、いずれも本質的な差異ではない。一方、歌の解釈に関しては、①～④は「この作者の妻はすでに死んでいる」という点で一致しており、また①、②、④は「韓衣」を防人の官給の服、あるいは軍用服と解している。③は「韓衣」を「裾の合わない作りの渡来人の服装」とした上で、今の場合、第二句の「裾」を強調するための単なる形式的な言葉（枕詞）だと解している。⑤も「韓衣」を枕詞と解している。

次の第2節では、上に示した先行研究の問題点について指摘し、続く第3節でこれらの問題点を解決できる新たな解釈を提案する。

2. 先行研究における問題点

従来の解釈には少なくとも二つの問題点がある。まず結句「母なしにして」について検討しよう。新編日本古典文学全集は、前節の注釈書②で、

このオモは子どもの母である妻をさす。最近死去したのであろう。子が父方で育てられたことを示す点で興味深い。

と述べている。もしこの注釈が正しく、子供の母（防人の妻）が最近死去し、子供が父方で育てられたのであれば、父が防人として旅立つ際に子供が裾に取り付いて泣くのは「お父さん行かないで」という理由

からであり、歌の結句は「父なしにして」となるのが自然ではなからうか。ところが歌の結句には「母なしにして」とあり、明らかに不自然である。なぜならば、通説のシナリオだと、防人がこの歌を詠む以前に子供がすでに母親とは死別しており、その後は父方で面倒を見ていたのであるから、今回の父親の旅立ちに際して子供が裾に取り付いて泣く原因は「父がいなくなる」ことしか考えられず、歌の結句にはその原因である「父なしにして」が来るべきだからである。あるいは「父母なしに」のように「母」が入ってもよいが、最低でも子供が泣く原因の「父」が入らないと不自然であろう。しかし、実際の歌には「父」を無視して「母なしにして」とあり、通説のシナリオとは明らかに食い違う。また父親は、今も昔も、仕事などで長期に家をあけることはよくあることだから、父親がいなくなるからと言って子供が「裾に取り付いて泣く」というイメージはなかなか想像し難い。ましてや結句に「母なしにして」とあるのだから、子供が泣く原因は「お母さん行かないで」と考えるのがもっとも常識的な解釈ではなからうか。以上が通説の第一の問題点である。

次に第二の問題点は、初句「韓衣」に関するものである。まず初めに、前節に示した五つの注釈書の「韓衣」に関する見解を確認しておこう。

- | | |
|--------------|------------------------------|
| 新日本古典文学大系 ① | 大陸ふうの服。防人としての官給の服。 |
| 新編日本古典文学全集 ② | 大陸様式の詰襟・筒袖の衣服。ここは作者の軍衣袴。 |
| 中西進・講談社文庫 ③ | 裾の合わない作りの渡来人の服装。ここは単に「裾」の強調。 |
| 澤瀉久孝・万葉集注釈 ④ | 韓風の着物。防人としての官給の服。 |
| 日本古典文学大系 ⑤ | 「裾」の枕詞。 |

①、②、④は「韓衣」を防人が着ている実際の服だと考えているが、③と⑤は単に「裾」を導くための枕詞で、実際の衣服ではないとする。このように「韓衣」の实在性に関しては意見が分かれているが、第二句の「裾」を防人の服の裾と解する点ではすべて一致している。

ところで、万葉集には「韓衣」を含む歌が全部で7首あるが、そのうち「裾」との関連で詠まれているものが4首ある。この4首のうち、今問題の4401番歌を除くと、残り3首はすべて「裾（の打交）が合わない」という韓衣の特徴らしき表現に関係しており、単に「裾」だけに掛かっている例はない。また、古今和歌集にも「唐衣」を含む歌が10首あるが、「裾」に関して詠まれた例は一つもない。したがって、「韓衣」を単に「裾」だけを導く形式的な枕詞とする③と⑤の説には疑問がある。よって以下では、①、②、④のように、この歌の「韓衣」は実在の衣服であるという立場に立って議論する。

ここで問題になるのは、①、②、④がいずれも「韓衣」を男性用の衣服と解している点である。もしこの歌の「韓衣」が文字通り単なる「外国風の着物」を意味するのであれば、通説が言うように「男性用の韓衣」があっても別に不思議はないかも知れない。しかし今の場合、作者はわざわざ「韓衣」という表現を用いているのであるから（五句のうち一句を費やして）、この韓衣は一般の人々が着ている普段着やどこでもよく見かける着物ではなく、特別な着物であろう。問題は、この特別な韓衣を誰が何の目的で着るかである。通説は、作者（防人）が軍服として着ると考えている。しかし、この歌の防人は現在の長野県上田市付近の出身であり、これから東山道の険しい山道を通り難波まで長旅をするのであるから、防人が着るべきものは「韓衣」ではなく「旅衣」であろう。実際、このことを別の防人歌（上総国の防人歌）が証言している。

20/4351 旅衣 八重着重ねて 寝ぬれども なほ肌寒し 妹にしあらねば

したがって、4401番歌の「韓衣」は防人の旅服とは考えられない。平安時代の「唐衣」^{からきぬ}がもっぱら女性用の唐風の高級衣装であることを考えると、発音は少し異なるけれども表記の類似性から見て、万葉集や古今和歌集に登場する「^{からころも}（韓衣、辛衣、唐衣）」もすべて同じ系統の着物だと考えられる。だとすれば、常識的に考えても、舶来の高級衣装で着飾るのはたいてい女性であり、しかもわざわざ歌の中に意識して「韓衣」と詠み込まれているのだから、4401番歌の「韓衣」は女性用の色鮮やかな着物だと考えるべきではなからうか。

万葉集には「韓衣」に関する歌が全部で7首あるが、その中で単なる枕詞や掛け言葉として用いられているものを除き、実在の衣服として詠まれているものに限ると、今問題にしている4401番歌のほかには次の一首があるのみである。

11/2682 韓衣 君にうち着せ 見まく欲り 恋ひそ暮らしし 雨の降る日を

この歌の「韓衣」は、例えば新編日本古典文学全集によると（[7]、p. 246）、「作者の女が彼に着せるために仕立てた衣」などと解されている。ほかの注釈書も男性用の着物とする点では一致している。しかし、このような解釈には問題がある。詳細は姉妹編の論文にゆずるが^[12]、ここに歌の骨子だけを示すと、この歌の韓衣は作者（女性）のものであり、彼が通って来た時に韓衣を一時的に彼に打ち着せて、彼が帰った後、次にまた逢うまでの長い期間、その韓衣を彼の「形見」として見て偲びたい、という内容である。したがって、この歌の韓衣は万葉集の「韓衣」が女性用であることを証言している貴重な例と言えるのである。

一方、時代を万葉時代から古今和歌集の平安時代初期まで繰り下げてみると、古今和歌集に10首ある「^{からころも}唐衣」の歌の中で、単なる枕詞や掛け言葉の例を除き、実際に人間が唐衣を着ていることを念頭において詠まれた歌は次の一首のみである。

0410 唐衣 きつつなれにし つましあれば はるばるきぬる 旅をしぞ思ふ

伊勢物語の第九段「東下り」に登場する在原業平の有名な歌である。各句の先頭音に「か・き・つ・ば・た」と花の名前が詠み込まれており、またいくつもの掛け言葉が巧みに詠み込まれているが、唐衣が女性（妻）の着物であることを暗黙の前提にしている。

したがって、万葉集と古今和歌集には女性用として詠まれた「韓衣」の例が2つあることになる。一方、従来男性用と解されてきた問題の4401番歌であるが、実はこの歌の「韓衣」もまた女性用であることを次節において示すことができる。このように、万葉集と古今和歌集を通して、少なくとも歌に詠まれた「韓衣」はすべて女性用ということになり、この結論は、平安時代以降の「唐衣」^{からきぬ}がもっぱら女性用の衣装であることともつじつまが合うのである。

以上見てきたように、前節に示した先行研究（①から⑤）には少なくとも二つの問題点があることが明らかになった。次節ではこれらの問題点を解決できる新たな解釈を提案する。

3. 万葉集4401番歌の新しい解釈

この節では、まず新しい解釈の結果を示し、その後にそれぞれの根拠を個別に示していくことにしよう。まず4401番歌の訓読、直訳、意識を示す。

【訓読】 韓衣からころむ 裾に取りつき 泣く子らを 置きてそ来ぬや 母おもなしにして

【直訳】 (見送りに出ようとする妻の) 韓衣の裾に取り付いて泣く子供を家に置いて、防人として旅立ってきたことだ。(家は) 母親なしの状態にして。

【意識】 防人として旅立つ際、途中まで妻が見送りに来てくれたが、子供が幼くて見送りに連れて行くことができず、家を出るときに妻の韓衣の裾に取り付いて「お母さん行かないで」と泣く子供を無理やり家に残して出て来たことだ。妻が見送りから家に帰るまで、家は(子供にとって)「母親なし」の状態にして。

上に示した新しい解釈の第一のポイントは、夫が防人へ旅立つ際に妻が途中まで「見送り」に行ったという点である。防人のような兵務に限らず、夫や息子が遠く長い旅へ出る場合には、家族は可能な限りの(たいていは日帰りできる距離までの)「見送り」をするものである。これが夫婦や家族の絆というものであるが、通説にはこの視点が完全に欠落している。以下、万葉集の「見送り」の例をいくつか見てみよう。

12/3215 白たへの 袖の別れを 難みして 荒津の浜に 宿りするかも

12/3216 草枕 旅行く君を 荒津まで 送りそ来ぬる 飽き足らねこそ

17/3957 天離る 鄙治めにと 大君の 任けのまにまに 出でて来し 我を送ると あをによし
奈良山過ぎて 泉川 清き河原に 馬留め 別れし時に...

20/4482 堀江越え 遠き里まで 送り来る 君が心は 忘らゆましじ

最初の二つは万葉集の巻十二に「問答歌」として掲載されている歌である。この歌の旅の目的や「荒津の浜」の所在地の問題は別にして、3215番歌と3216番歌が問答歌であることから、船旅に出ようとする男を女が「荒津の浜」まで出向いて見送りしていることがわかる。第三番目の3957番歌は、大伴家持が弟(大伴書持)の死を悲しむ長歌であるが、越中国に赴任する兄を弟が都から奈良山を越えて泉川(現在の木津川)まで出向いて見送りしたことがわかる。歌には弟のことしか出ていないが、おそらく他の家族や縁者たちもいっしょに見送りをしたであろう。第四番目の4482番歌は、藤原執弓が播磨介に赴任するとき、難波の堀江を越えて「遠い里」まで見送りした人に対する感謝の気持ちを詠んだ歌である。続いて、防人に関する「見送り」の例を見てみよう。

20/4375 松の木の 並みたる見れば 家人の 我れを見送ると 立たりしもころ

14/3571 己妻を 人の里に置き おほほしく 見つつそ来ぬる この道の間

最初の歌は万葉集巻二十に掲載された下野国の防人の歌である。松の並木を家族の見送りの様子に譬えたものである。見送り場所は不明だが、歌に「家人が見送る」とあるから、下野国のどこか(船旅であれば近くの海岸か)であろう。第二番目の3571番歌は、東歌を集めた万葉集巻十四の巻末あたりに掲載された五首からなる防人歌の一つである。この歌は、今問題になっている4401番歌と同じく防人に旅立つ男の歌であり、初句と第二句の「己妻を 人の里に置き」という表現は、

妻が自分を見送るために故郷の里を遠く離れて「よその里(人里)」までついて来た、その妻を人里に置いて(その人里で妻と別れて)

という意味だと思われる。このように解すると、この節の最初に示した4401番歌の解釈と完全にコンシステントになる。

ところが3571番歌の通説は、別れに付きものの「見送り」という視点が欠落しているため、以下のような問題のある解釈となっている。主な注釈書の解釈を以下に示す。ただし、注目箇所には波線を付け、以下の議論に関連のない注釈は省略した。

新日本古典文学大系^[6]

大意：自分の妻を他人の里に置いて、心晴れずぼんやり見ながら来たことだ。この道中ずっと。

注釈：「人の里」は、妻の生家のある里か。「おほほしく」は、鬱々とした暗い気持での意。

新編日本古典文学全集^[7]

大意：自分の妻をよその里に住まわせて 気も晴れず 見返りながら来た この長い道をずっと

注釈：人の里に置き——人ノ里は自分に対して好意的でなく不安に思われる村里をいう。この置くは、防人として筑紫に派遣されている三年間、妻の実家などに預けることをいうのであろう。

中西進・講談社文庫^[8]

大意：自分の妻であるものを、人里においておぼつかなく眺めながらやって来た。この道のりを。

注釈：己妻を人の里——オノとヒトとは反対語。自分の自由にならない、他人のいる里。

澤瀉久孝・万葉集注釈^[9]

大意：自分の妻をよその里に残して置いて、おぼつかなくその里の方を見ながらやつて来たことよ。この道のあひだ中。

注釈：己妻を人の里に置き——「ヒトノサトハ他郷なり」と代匠記にある。「他部落に、通ふ妻を持つて居た場合であらう」と私注に云つてゐる。

日本古典文学大系^[10]

大意：自分の妻を人の里に置いて、はっきり見えないながら、見い見いここまで歩いて来てしまった。この道の間中を。

注釈：他（ひと）の里——他人の里。

さて、上に示した解釈の妥当性について検討しよう。新日本古典文学大系と新編日本古典文学全集は第二句の「人の里」を「妻の実家」と解している。ところが、この解釈は常識に反している。なぜならば、夫が防人として旅立ったら、妻は家を守り、残された子供や老いた父や母の面倒を見るのが日本古来の常識であろう。実際、万葉集の防人に関する約120首の歌をすべて調べてみたが、防人が出発した後、妻を実家に帰すような内容のものは一つも見当たらない。逆に、常識どおり、妻は家（夫の家）に残っているという内容の歌が4首ある。以下に示す4首のうち、第四番目の4416番歌だけが女（防人の妻）で、あとの3首はすべて男（防人）の歌である。

20/4423 足柄の 御坂に立して 袖振らば 家なる妹は さやに見もかも

20/4364 防人に 立たむ騒きに 家の妹が 業るべきことを 言はず来ぬかも

20/4427 家の妹ろ 我を偲ふらし 真結ひに 結ひし紐の 解くらく思へば

20/4416 草枕 旅行く背なが 丸寝せば 家なる我は 紐解かず寝む

まず最初の歌を見ると、作者の防人が「家なる妹」と詠んでいるから、この「家」は作者本人の家であ

り、妻の実家ではあり得ない。また、「家なる妹」は「家にある妹」の「にあ」が「な」に縮約されたもので「家にいる妹」の意である。したがって、この歌から、防人が旅立った後、妹は「防人の家」に残っていることがわかる。次の4364番歌と4427番歌の「家の妹」についても同様である。最後の4416番歌は防人の妻の歌であるが、この歌は直前の夫の歌に答えて詠まれたものであり、「家なる我れは」の「家」は「現在自分がある家（夫の家）」と解釈すべきであろう。以上のことから、先に示した防人歌（3571番歌）の「人の里」を、新日本古典文学大系や新編日本古典文学全集のように「妻の実家」と解するのは適切とは言えない。

一方、3571番歌の「己妻を 人の里に置き」を、澤瀉久孝氏のように「他部落に、通ふ妻を持つて居た場合であらう」（万葉集私注（土屋文明）の引用）と解することの妥当性であるが、最初からずっと他部落にいる妻のもとに通い続けてきたのであれば、防人に旅立つからと言って別に妻の居場所が変わるわけではないから、わざわざ「己妻を 人の里に置き」と言う必要はない。

以上見てきたように、3571番歌の「己妻を 人の里に置き」に関する従来の解釈はいずれも適切とは言えず、先に述べたように、防人として旅立つ夫を妻が「見送る」という視点から、「妻が自分を見送るために故郷の里を遠く離れてよその里（人里）まで付いて来た、その妻を人里に置いて」と解するのが妥当であろう。もしこの解釈が正しいとすれば、3571番歌と4401番歌はともに「防人として旅立つ夫を妻が（遠くまで）見送る」という内容として完全にコンシステントなものとなる。

さて、4401番歌に関する新しい解釈の第二のポイントは、「韓衣」が女性用の衣服（ここでは妻の衣服）であるという点である。妻にしてみれば、長期間にわたって夫と別れるのであるから、できるだけ美しい姿を見せて見送りたい気持ちから韓衣を着てドレスアップしたのであろう。あるいは、いっしょに見送りに来たほかの女性たちに対して、信濃国の国造の妻としてのプライドも手伝って、一般の女性たちには入手できない舶来製の高価な韓衣を着て見送りに行ったのかも知れない。一方、防人に旅立つ夫（この歌の作者）にしてみれば、自分の妻が美しい韓衣を着ているのが自慢で、この歌の中にわざわざ「韓衣」という一句を入れたとも考えられる。このように考えると、この歌には「韓衣」が詠み込まれるべき必然的な理由がちゃんとあり、約1300年を経た今日においてなお常識の範囲内でその理由が容易に読み取れるのである。

さらに、第三のポイントとして、この歌の結句が「母なしにして」となっている理由であるが、これは単純で、子供がまだ幼いからである。もし子供が自分の足で歩いて母親といっしょに見送りに行ける年齢であれば、母親といっしょに見送りに行くはずであり、したがって歌の中に「母なしにして」や「唐衣裾に取り付き 泣く子ら」という表現が出て来ることはないだろう。

最後に、4401番歌の解釈に関連して次のことに触れておきたい。中西進氏は、「解説委員室ブログNHKブログ」の「視点・論点「万葉の心を未来に」」の中で次のように述べている（波線は筆者）^[11]。

最後にもう1つ、こういう歌をお目にかけます。で、これはですね、戦争に關した歌なんです、さっきも言ったけど当時の兵隊さんたちの歌が万葉集に載っております。そこで出征していく兵士がいるんですが、そのときに出征する兵士がですね、「韓衣 裾に取りつき 泣く子らを 置きてそ来のや 母なしにして」、という歌を歌います。韓衣というのは、あとが、裾が合わないんですね。ですから、その裾に取りついて泣く子、それですから、子どもを残していく。で、それを私は置いてきたことだって言うんですね。

それでそれはどうなるかというと、母なしにして、つまりあと、お母さんがなくてと言うんです。ですから妻はもう死んでるんですね。ですからもう孤児になってしまうんです。しかも自分は出征して

しまう。母親もいない。だから両親がいってしまったら、この子たちはどうなるだろうということを考えるんですね。そういうことを出征をする兵士が考えているというのが、この歌であります。こんなふうな戦争の悲惨さというものも、確かに万葉集の中にはあるんです。

ここでは4401番歌を「戦争の悲惨さ」を詠んだ歌だと解説しているが、歌の細かい解釈の是非は別にして、防人というものは、大伴家持が「防人の悲別の情を陳べし歌」と題する4408番歌の先頭で「大君の任けのまにまに 鳥守に 我が立ち来れば…」と詠んでいるように、あくまでも「鳥守」（国境の警護）の任務であり、「戦争」への出征ではない。万葉集巻二十の防人歌はすべて天平勝宝七年（755）のものであり、この時期に外国との戦争はないから（4年後の天平宝字3年から数年間新羅征伐に向けての動きがあるが実施はされない）、これらの防人の任務はすべて「平時」の鳥守である。したがって、この歌は「戦争の悲惨さ」を詠んだものではあり得ない。大伴家持が4408番歌で言っているように、防人という日本国の国境防衛の任務に赴く際に「悲別の情」であり、この感情は、現代の（携帯）電話のように遠く離れた相手の安否を容易に確認するすべのなかった時代にあって、柿本人麻呂や大伴家持など長期間にわたって地方の国々を廻って任務を果たしてきた多くの官人たち「すべて」が経験しているものである。何も防人やその家族だけに限らない。そのことは万葉集中の膨大な数の羈旅の歌や別れの歌などを見れば一目瞭然である。したがって、万葉集の注釈書を著す専門家が、市民に向けてこの歌を安直に「戦争の悲惨さ」を詠んだ歌と紹介しているのを見るにつけ、これが果たして「万葉の心」なのだろうか大きな疑問を感じざるを得ないのである。

4. おわりに

本論文では、万葉集4401番歌に関する従来の解釈を再検討し、以下の三つの結論を得た。第一に、初句の「韓衣」は、通説が言うような防人の衣服や単なる枕詞などではなく、防人の妻が見送りに行くために実際に着た着物であること。第二に、妻は韓衣を着て夫の見送りに行くが、子供が幼いので見送りに連れて行くことができず、やむを得ず家に残そうとした時に子供が母親の韓衣の裾に取り付いて泣いたこと。第三に、結句「母なしにして」は、母親が見送りから家に帰るまでの間、子供にとって「母なしの状態」になることを意味していること。ここに示した三つの結論が妥当なものであるかどうか、多くの方々のご批判をおおぎたい。

最後に、歌の内容には直接関係しないので本文中では触れなかったが、初句の訓み方について補足しておきたい。初句の原文は底本（西本願寺本）などには「からころも（可良己呂茂）」とあるが、通説は句末の「茂」を「武」の誤字だとして「からころむ」と訓んでいる。この訓み方の根拠は三つある。第一に、元暦校本・類聚古集・広瀬本に「武」とあること。第二に、第1節の注釈書①が指摘しているように、万葉集には「茂」を「も」の音仮名に用いた例が3つしかないこと（4401番歌を除く）。第三に、防人歌には「いも（妹）」→「いむ」（4321、4364番歌）、「さきもり（防人）」→「さきむり」（4364番歌）、「くも（雲）」→「くむ」（4403番歌）、「かも」→「かむ」（4403番歌）のように中央語の「も」を「む」に訛った例があること。以上の三つの根拠を見ると、一見、通説の「からころむ」は適切な訓み方であるように見える。しかし、これには次のような反論が可能である。

第一に、「茂」と「武」のいずれが正しいかという問題であるが、これは写本の信頼性の問題に帰着する。通説は元暦校本などを信用しているが、二つの姉妹編の論文でも示したように（[13]、[14]）、734番歌と3122番歌の結句の表記に関する問題で、通説は元暦校本などの「乎」を正しいとするが、実は底本などの「牟」の方が正しいことを示した。したがって、今回の場合も、元暦校本などの「武」の方が誤写で

あり、底本の表記「茂」の方が正しい可能性がある。

第二に、「茂」を「も」の音仮名とする例が(4401番歌のほかには)3例しかないという点であるが、結論として、これは特に異例というほどではない。万葉集には「茂」の字が全部で26例あるが、そのうち22例は「しげる」の訓字として用いられ、残りの4例が「も」の音仮名である。これが異例というほどでないことは、例えば、「飛」の字が全部で42例あるが、そのうち37例が「とぶ」という訓字で、残りの5例が「ひ」の音仮名であることを見ても明らかである。

第三に、先に実例を示したように、防人歌にはア音、イ音、ウ音に続く「も」が「む」に訛る例があることは確かであるが、オ音に続く「も」が「む」に訛る例はない。実際、今問題の4401番歌は別にして、東歌と防人歌に限定して「ころも = 衣」の例を調べると、全部で7例あるが(3449、3482(2つ)、4351、4388、4424、4431番歌)、いずれも「ころも」であり「む」に訛っていない。

以上のことから、通説の訓み方を正当化する新たな根拠でも出てこない限り、4401番歌の初句は底本の「茂」を正しいとして「からころも」と素直に訓むべきではないだろうか。この訓み方は、上代特殊仮名遣の観点から「ころも」の「も」と「茂」がともに乙類であることともつじつまが合う。

参考文献

- [1] 「萬葉集 四」、新日本古典文学大系、岩波書店、p. 429、2003年。
- [2] 「萬葉集④」、新編日本古典文学全集、小学館、pp. 413-414、1996年。
- [3] 「万葉集 原文付全訳注(四)」、中西進、講談社文庫、p. 319、1983年。
- [4] 「萬葉集注釋 卷第廿」、澤瀉久孝、中央公論社、pp. 136-137、1968年。
- [5] 「萬葉集 四」、日本古典文学大系、岩波書店、pp. 436-437、1962年。
- [6] 「萬葉集 三」、新日本古典文学大系、岩波書店、pp. 379-380、2002年。
- [7] 「萬葉集③」、新編日本古典文学全集、小学館、p. 516、1995年。
- [8] 「万葉集 原文付全訳注(三)」、中西進、講談社文庫、p. 287、1980年。
- [9] 「萬葉集注釋 卷第十二」、澤瀉久孝、中央公論社、pp. 266-267、1963年。
- [10] 「萬葉集 三」、日本古典文学大系、岩波書店、pp. 454-455、1960年。
- [11] <http://www.nhk.or.jp/kaisetsu-blog/400/9585.html>
- [12] 竹生政資・西晃央、万葉集2682番歌の「韓衣君に打ち着せ」の解釈について、佐賀大学文化教育学部研究論文集、第16集第1号、pp. 43-49、2011年。
- [13] 竹生政資・西晃央、万葉集734番歌の「手に巻かれむを」について、佐賀大学文化教育学部研究論文集、第16集第1号、pp. 27-33、2011年。
- [14] 竹生政資・西晃央、万葉集3122番歌の「今日だに逢はむを」について、佐賀大学文化教育学部研究論文集、第16集第1号、pp. 35-41、2011年。